

第一章

「お迎えにありがとうございました、イヴリン姫」

「ひっ……！」

「やっと……やっとですよ。どれだけあなたを探していたか分かりますか？もちろん、俺が誰だかお分かりですよ、俺の愛しい姫……」

「ひゃ、ちょ、まっ！」

「……姫？まさかお忘れですか？俺ですよ、あなたの騎士であり婚約者のロズウェルド・マクシミランです」

「ひい！」

綺麗に整えられた黒髪にローズピンクの瞳。女なら誰でも虜になるような甘く整った顔に、しなやかに筋肉がついた180センチは超えている体

軀。そんな男がうっとりと笑いながらサインペンを持つ自分の手をぎゅうっと握り込み、カリカリと指の間を引っ搔いてくる。

「ま、待って。ちょ、あの、私！」

「ずーっと俺から逃げ回ってたんですか？俺はずっとあなたを探してたのに？」

最近テレビでチラッと見た人物がそこにいる。「アイドル特集」と銘打った番組にはあまり興味がなく、すぐにチャンネルを変えてしまったが。見た時にはあまり表情を変えない冷静な人物に見えたが、今はまるで大型犬のように自分の手に頬を摺り寄せてきている。

この男、テレビで見た時は気付かなかったがよく見れば見知った顔だ。そう誰よりも見知った顔。恋焦がれ、そして決して自分に振り向いてはくれなかった顔。そのローズピンクの瞳の輝きは以前と全く変わっていない。

（ロズウェルド・マクシミランって…、前世で私を殺した婚約者なんですけど??）



「…本当に誰か来るのかなあ」

「大丈夫ですよ、先生。一人くらいは来てくれますって」

「それ、慰めてるつもりですか？」

「あ、ちょっと書店の店長さんに挨拶してきまーす」

書店の奥に置かれた折り畳み式のテーブルとパイプ椅子。開店前の書店の中で一人ぼつんと椅子に座りながら、浪平梨々子（なみひら・りりこ）は今世では初めての大舞台に吐きそうなほど緊張していた。

梨々子には前世の記憶がある。そう、この現代日本とは違う魔法が存在するファンタジーの世界で生きた記憶が。そしてその世界で我が儘放題やり放題して処刑されてしまった記憶が。

自国を私利私欲のために滅ぼした美しき悪辣王女、イヴリン・フォン・アルガジエードが梨々子の前世の名前だ。イヴリンはそれはそれは美しい女だった。まつ毛バサバサのサファイヤのような青い瞳、サラサラの金色の髪。真っ白な肌に抜群のスタイルのイヴリンは、早くに母親を亡くし、父によって育てられた。母親を亡くしたことに同情しつつも、父はイヴリンを立派な王女にしようと頑張った。しかし、イヴリンはいつしか自分の美しさだけを磨き上げ、国の金を自分のために使うようになった。国の財政は悪化し、立て直そうとした王の力も及ばず、イヴリンは悪政に耐えかねた革命軍によ

って処刑されてしまったのだ。

そんなとんでもない悪女だったせいかな、今世で梨々子は見た目はもちろん、境遇においてもとんでもなくグレードダウンした生活を送っている。前世と違い、いくら寝ても取れない隈がある瞳は奥二重で特徴もない。少し上向きの鼻と乾燥気味の小さな唇。肌は少し浅黒く、胸もお尻もぺちゃんこだった。それに今世では赤ん坊の頃に親に捨てられ、ずっと一人で生きてきた。全てにおいて前世以下の生活をしているのだ。

「まあ、仕方ないか……。悪役令嬢ならぬ悪役王女だった訳だし」

けれどせっかく生まれ変わったのだからと、前世のようにならないよう細々と頑張ってきた。その努力が実ったのがネット上で書き続けてきたファンタジー小説だった。

実は前世の話をほとんど丸パクリしているのだが、誰にも分かりはしな

いだろうと更新を続けてきた。なんとそれが出版社の目に留まり、この度書籍化することになったのだ。高校卒業後は小さなスーパーで働いてきたが、もちろん生活は苦しい。お金もなければ学もない人生だ。それでもできるだけのことはやっていこうと頑張って来た自分の人生にやっと少しの光が当たり始めたのだ。

今日はそんな梨々子の処女作の発売日。出版社が用意してくれた会場は小さな書店だったけれど、梨々子にとっては十分すぎるほどだった。

（一人くらい来てくれるといいなあ…）

そんなことを思っていると、店の開店時間になる。SNS等で告知はしてあるので、ファンがいるならきつと来てくれるはずだと梨々子は姿勢を正す。

「そろそろですよ、プリズム先生」

梨々子の編集を務める同い年の男、柿崎（かきざき）がゆっくりと歩きながら戻って来る。

「分かってますよ」

「もし来なかったら僕がこの書店にある分の先生の本を買い尽くして、全部売れたって編集長に報告します」

「それって有りなんですか……？」

「全部売ったらボーナスって言われてますから」

細い目をさらに細めて柿崎が笑った。

梨々子の心配をよそに、サイン会には予想したよりも多くの人に来てくれた。開店当初には数人の行列もできていて、梨々子に「作品、本当に大好きです！特に悪役王女を倒す騎士のローズが大好きです！」と興奮気味に

話してくれるファンもいたぐらいだ。

騎士のローズは、もちろん自分を処刑したロズウェルドがモデルだ。ロズウェルドは本当に国を思う立派な騎士だった。剣の腕前も国一番で、その美貌で国中の女性を虜にしていた。そんなロズウェルドを当たり前のように好きになったイヴリン。彼女は自分からロズウェルドに告白した。きつとロズウェルドも同じ気持ちだと信じて。

「俺はあなたと結婚しません」

まっすぐに見据えられて言われた拒絶の言葉。それを思い出すだけで、ツキンと心が痛む。

そして、もう一つはつきりと覚えているのが、反乱軍のリーダーとして革命を起こし、血まみれの剣を手に自分を見下ろすロズウェルドの姿。

「なんでこんなことを！」

そこでイヴリンの記憶は途切れているので、きっと死んだのだろう。小さい頃から何度も苦しめられた悪夢だ。

——きっと、国を滅ぼした私の罰なんだろうなあ。

お昼も過ぎてサインを求めるファンもいなくなった。編集の柿崎は「なんか弁当買ってきます」と言って先ほど書店を出て行った。

「私も少し休憩しようかな…」

小さく呟いて立ち上がった時。

「サイン、いいですか？」

ぬっ、とやけに身長の高い男が梨々子の前に立ちふさがる。

「ひゃっ！」

梨々子がぎゅっと手を握り込んで悲鳴を上げる。すると、男はぴたと動きを止めて後ろに下がった。

「いきなり声を掛けて申し訳ありません。：プリズム先生のファンで、今日、サインを貰いたくて仕事を休んできたんです。少しでもお時間いただけませんか？」

男は黒いキャップに黒いマスクを付けていて、顔が見えない。けれど、あまりにも必死に自分を引き止めようとするので、そのいじらしさに梨々子は思わずはにかんだ。

「っ！」

それを見て男は息を詰まらせる。

「もちろん！時間ならいくらでもありますから！サインも何個でもしますよお！」

ブンブンと腕を振り回してパイプ椅子に座ると、梨々子は男から本を受け取った。そして、さらさらとサインを本に書いていた時。

「やっと見つけましたよ、イヴリン姫」

男に自分の右手を取られてしまったのだ。



「あなたがイヴリン姫ですよ？もう分かっているんですから、ちゃんと返事をしてください」

「っ、ひ、姫って一体なんなんですか！」

梨々子は必死になってロズウェルドから自分の手を引き抜こうとする。

しかし、男の手は強くてビクともしないのだ。

「どうか名前を呼んでください」

ロズウェルドは蕩けるような笑みを浮かべて、梨々子の手のひらに口づ

ける。

「っや！」

そこがまるで燃えるように熱くなった気がして、梨々子は顔を真っ赤にして全力でロズウェルドの腕を振り払った。

（だ、誰かいらないの！）

梨々子は回りを見渡してみるが、ちょうど誰も見当たらない。頼みの綱の柿崎も弁当を買いに行って帰ってこないのだ。

（柿崎いゝ！）

「…イヴリン姫なんですよね？そうだって言ってください」

「ひっ！」

ロズウェルドがバンツとテーブルに両手を付いて、自分を見下ろしてくる。その迫力に、梨々子の瞳が少しだけ潤んだ。

「っ！」

それを見て、少しだけロズウェルドの勢いが削がれたように見える。

「プリズム先生く？どうかしましたく？」

そんな時、柿崎がのんびりした口調で片手に弁当が入ったビニール袋を持ちながら帰って来た。

（か、柿崎い……！）

持つべきものはタイミングの良い編集者だと、先ほどの文句を撤回した梨々子は立ち上がり、慌てて柿崎に駆け寄ろうとする。

「……どこに行くんですか？」

「ひい！」

しかし、その前にロズウェルドによって腰を抱かれグイッと引き寄せられてしまった。

「ちょ、や、やだあ！離して！」

「絶対に離しません。お願いします…頼むからイヴリン姫だって言うてください」

「ひう…！」

ロズウェルドの低く艶のある声が梨々子の耳朶をくすぐる。いっぱいっばいになっていている梨々子は気付かなかったが、ビクンと反応した腕の中の梨々子を見て、ロズウェルドは心底嬉しそうに笑っていた。

「…プリズム先生？その方、お知り合いか何かですか？」

抱き合っていればそう思うだろうが、そんな訳ないと反論しようとした梨々子の口をロズウェルドが片手でがつつりと塞いで美しく笑う。

柿崎が近づいてくる前に黒いキャップを被り、マスクを直したロズウェルドが梨々子の口を塞いだまま、先に話し始める。

「そうです。俺、彼女の夫でして」

「ん~~~~~!」

「…へえ」

柿崎の瞳が一瞬だけ細められるが、すぐに笑顔に変わった。

「プリズム先生、結婚されてたんですか！知りませんでしたよ、ちゃんと教えてくださいよお！あ、丁度書店にあった先生の本、全部売れたみたいなんです、ノルマクリアです！今日は帰ってもらっていいですよ！旦那さんに迎えに来てもらえて良かったですね！」

僕は挨拶して帰りますと言って柿崎はぶんぶんと大きく手を振って去っていった。

（か、柿崎い~~~~~!）

「さあ、行きましようか。話したいことが山ほどあります」

「っうう…」

荷物のように抱えられた梨々子は、ロズウェルドのものであろう高級車の助手席に放り込まれ、白昼堂々誘拐されてしまったのだった。

「イヴリン様。どうかお声を聞かせてください」

「…」

梨々子は車の中でもずっと黙っていた。ロズウェルドは自分をイヴリンだと信じ切っているようだが、まだ自分は返事をしていない。

（まだ何のことか分かりませんが押し通せる！）

そんなことをぐるぐる考えている間に、ロズウェルドは勝手に車を運転し、とんでもなく高いマンションの駐車場に車を停めてしまった。

「っは！」

「着きましたよ？」

「つ、着いたってどこに！」

「俺の家です」

「い、家!？」

「はい。さあ、降りてください」

「っやだ！」

梨々子はぶんぶんと首を横に振ってシートベルトをぎゅうつと握りはつきりと拒否反応を示す。それをハンドルに持たれながらじーつと見つめていたロズウェルドは「はあ」とため息をついて運転席から出て行った。

（あ、諦めてくれた…？）

前世の見た目と酷似しているロズウェルドと違い、自分は前世の見る影もない。やっぱり人違いだと納得したのだろうと胸を撫でおろした時、助手席の扉を開けられ、梨々子は悲鳴を上げて縮こまった。

「っな！」

「…何を驚いていらっしゃるんですか？」

「だ、だって！諦めたんじゃない！」

「…ここまで連れてきて諦める訳がないでしょう」

そう言って、ロズウェルドは地面に跪いた。

「っ！ちょ！」

「イヴリン様。俺が部屋までお運びします。どうかロズウェルドの体にお掴まりください」

「っうう！」

梨々子は顔を真っ赤にして固まってしまう。ロズウェルドは梨々子が動かないことをいいことに、梨々子が履いている安物の靴と靴下を脱がせ、その足に恭しく口付けた。

「なっ!」

「姫…。どうか役立たずの愚かな騎士にあなたをお運びする栄誉をお与えください」

「やうっ!」

ロズウェルドがちゅぷ♡と梨々子の親指を口に含み、レロオ♡と舌を絡ませる。

「やっ…嘘っ!やだやだやだっ♡」

「ん…姫…姫様…」

「やだあ…ロズウェルド、やだあってえ…♡♡」

（こ、こんなこと前世でもされたことないのにつ！）

イヴリンは、何度も自分の体で彼に迫った。酷い時には勝手に部屋まで乗り込み、裸で彼に抱き着いたこともある。けれど、ロズウェルドは決してイヴリンを抱こうとはせず、顔を歪めながら「こんなことはやめてください」と首を横に振ったのだ。

「なっ…なんで、こんなことっ…!」

「イヴリン姫…これ、気持ちいいんですか…?」

「ひうッ♡」

ロズウェルドがレロレロ♡指と指の間を舐めながら上目遣いで尋ねてくる。

「やあああ♡やめ、やめてロズうっ♡」

「…やはりイヴリン姫で間違いないようですね」

ロズウェルドがゆっくりと口を離して、息も絶え絶えの梨々子の体を抱き上げる。

「なんで…」

「俺のことをロズと呼ぶのはあなただけだったんですよ、イヴ」

ロズウェルドの瞳に映る自分を酷く醜く感じて、梨々子は思わず目を伏せる。すると、ロズウェルドはゆっくりと梨々子の顎を撫でた後、上を向かせた。

「俯かないでください。もっとあなたの顔を見せて」

「やっ…やだあ」

逞しい体に横抱きにされているせいで、身動きが取れない梨々子はせめて顔だけでもと思い、必死に顔の前で腕をクロスする。

「どうして隠れるんですか、イヴ？」

「だって…だって！見られたくない！あなたただけには見られたくなかったの！」

「どうして俺だけ？」

「っ酷い！酷い酷い酷い！分かってる癖に！前世からずっと分かってる癖にい！」

梨々子の目からボロボロと涙が零れ落ちる。

「見せて」

「やだぁ！」

ロズウェルドは梨々子の手を力づくで掴み上げ、涙と鼻水でぐちゃぐちゃな梨々子の顔を上からじーっと見つめている。

「なんで…なんで見るの！見ないで！見ないでよぉ！」

「…前世とは全く違うお姿ですね。容姿がお変わりになられたご気分はい

かがですか？」

「っふううう~~~~~~~~!!」

ロズウェルドの言葉に涙腺が崩壊した梨々子は子供のように泣きじゃくり始める。

「ひどっ…ひどいっ…ひどいいい。なんで、なんで会いに来たのっ…なんでえ！」

「…俺の部屋に行きます。泣き声を少し抑えてください」

「ふうう…うえ…うえええ」

「全く…」

少しも声を抑えられない梨々子に呆れたようなため息をついたロズウェルドは、自分の胸に梨々子の顔を片手で押し付け、そのままのしのしと歩き出す。その手が信じられないくらい優しく、梨々子はまたむせび泣いたの

だった。

ロズウェルドの家に着いた瞬間、我に返った梨々子はめちやくちやに暴れて逞しい腕の中から脱出した。

「危ないですよ、イヴ」

「私はもうイヴじゃない！」

「では今世のお名前を教えてくださいませんか？」

ロズウェルドが手を差し出してゆっくりと近づいてくる。

「近づかないで！」

悲鳴のような声で怒鳴りつけると、梨々子は必死に部屋の奥へ逃げ出した。

（ど、どこか鍵のかかる部屋は！）

長い廊下にはあちこちに扉があり、ロズウェルドの家がどれだけ広いかがすぐに分かる。一番奥の部屋の扉を開けると、そこは美しい夜景を一望できる一面ガラス張りのリビングだった。

「綺麗……」

ぽかんと口を開けてその光景に見とれていると、後ろからするっと腕が伸びてきて、梨々子の腰を引き寄せる。

「……気に入りましたか？ 今日からこの景色はあなたのものですよ」

「っひゃあ！」

かぷ♡っと耳朵を甘噛みされ、顔を真っ赤にした梨々子はまたロズウェルドの腕から逃れる。しかし、今回は腰が抜けてしまい、前にべしゃっと倒れ込んでしまった。

「はは。姫様、そんな姿を晒して。俺を試してるんですか？」

「っう、うるさい！」

顔を赤くしたまま、梨々子は四つん這いで部屋のリビングの奥へと逃げる。

「こ、ここなら！」

リビングの奥にある扉が開いていて、中にはバスタブが見える。お風呂ならきつと鍵がかかるだろうと予想し、梨々子は必死で足を動かしその部屋に飛び込んだ。

「っやった！鍵があった！」

急いで扉の鍵を閉めると、お湯の張っていないバスタブの中に入り込み、身を隠す。少ししてから、コンコンと扉をノックする音がした。

「イヴ。どうして隠れるんですか？ここを開けてください」

「っ！」

余裕のある、そしてなぜだか少し嬉しそうな声に梨々子は苛立ってしまった。
う。

「や、やだ！開けない！どっか行ってよ！」

「姫様。隠れても無駄だって分かっているでしょう？ここは俺の部屋です。立てこもったってどうしようもないですよ？」

「っそれでもあなたに見られたくない！」

「…」

ぎゃんぎゃんと泣き喚き始める梨々子の声を聞いて、ロズウェルドが押し黙る。

「どうして…どうして今更私を見つけたの、ロズ。私を探してた？嘘つき！嘘つき嘘つき！私のこと大嫌いだった癖に！私の婚約者になったのに、一度だって抱いてくれたことなかったじゃない！」

「…」

扉の向こうからの返事はない。もしかしたら嫌いな女に風呂場を占領されて苛立っているのかもしれない。でももうそんなこと知らない。嫌いな女を自室に入れたロズウェルドが悪いのだ。梨々子はわんわんと泣き喚きながら話し続ける。

「どうして私を探し出したりなんかしたの！今世は慎ましく、一人で生きようと思っていたのに！あなたを忘れて、この平凡な見た目と人生で前世の報いを受けようと思ったのに！今更どうしてよ！」

前世のことを思い出したのは、中学3年生の時。そして思い出した瞬間に自分を鏡で見て絶望した。

——ああ、今世もロズウェルドは私を見てくれない。

そもそもロズウェルドが転生しているかも分からないのに、最初に思っ

たことはそれだった。

そう、イヴリンはロズウェルドのことが好きで好きでたまらない女だった。幼い日に、父から「お前の護衛騎士だ」と言って紹介された美しく聡明な騎士。ロズウェルドはイヴリンが大好きな絵本に出てくる強くてかっこいい騎士そのものだった。イヴリンはずっとロズウェルドのことを好きだった。そして自分は見た目もいいし、お姫さまだからきつとロズウェルドも自分のことを好きになってくれると思いついていたのだ。

護衛騎士として城で暮らし、訓練をしている彼の下へ、イヴリンは何度も会いに行った。ロズウェルドも少し困った顔をしながらも、いつもイヴリンの相手をしてくれた。

（ロズウェルドもわたくしのことが好きなんだわ）

そう思っていたイヴリンは18歳の誕生日、いくらアプローチしても全

く女性として見てくれないロズウェルドに業を煮やし、イヴリンは彼の同意を取らず、婚約を王に頼んだのだ。誕生日パーティーで自分をエスコートしてくれるロズウェルドには内緒にしていた婚約発表が行われた時。彼の腕をイヴリンが掴もうとした。

「…あなたと結婚はできません」

「…え？」

「どうかお許しください、イヴリン様」

「は…、え…？」

その場に跪き、許しを請うようにイヴリンの力なく垂れ下がった手に口づけるロズウェルドを見る。彼は頭を下げ、決してイヴリンを見ることはない。

「う、嘘でしょ？ロズウェルド？わ、わたくしのこと、好きなんでしょ？」

「…どうかお許しを」

「嘘…嘘よ！わたくしのことを好きだと言いなさい！」

「…お許しを」

「っ！ロズウェルド・マクシミラン！これは命令です！わたくしのことを愛しているといいなさい！わたくしと結婚して、子をなすと！今そう誓いなさい！」

「…イヴリン姫、どうかお許してください」

「ロズウェルド!!」

そこから、王女としてある程度の我が儘が許されていたイヴリンは、度を越えた「悪辣王女」として狂い始めた。自分を愛していない男を振り向かせるため、できることは何でもした。お金を使ってロズウェルドが欲しがりそうなものを全てプレゼントした。護衛騎士から騎士団長にも自分の一存で

出世させた。自分の美しい体で迫りもした。

けれどロズウェルドはいつも困った顔で「どうかお許しを」と首を垂れるだけ。イヴリンの我が儘で婚約だけはなされたものの、一度も夜を共にすることはなく、婚約から2年後のイヴリンが20歳の時。ロズウェルドにより、イヴリンは殺されてしまったのだった。

「ふう…どうして…どうして私の前にまた現れるの…？」

バスタブにうずくまり、一人泣きじゃくっていた時。ピロンという可愛らしい音が鳴った後、浴槽に勝手にお湯が溜まり始めた。

「きゃあ！」

下半身がびしょびしょに濡れてしまった梨々子は、悲鳴を上げて慌てて立ち上がる。その瞬間、バキイ！という鈍く大きな音が響き、梨々子はまた

悲鳴を上げてバスタブに尻もちをついてしまった。

「っあ…あう…」

「…ご自分でお風呂に入ってくださいるなんて、本当にイヴはいい子ですね」
「ひっ！」

リビングへと続く扉が蹴破られ、Tシャツを脱いで上半身裸になったロズウェルドがゆっくりとバスルームに入って来る。そして腰が抜けてしまった梨々子の前に立ち、腰をかかめると、わなわなと震える唇に優しくキスをした。

「んうう!？」

（なっ！なんでキスなんか！）

梨々子がやめさせようと両腕を動かして暴れるが、ロズウェルドに片手で易々と拘束されてしまう。

「ふう…んう♡…ふあ…♡」

「ん…イヴ…イヴリン…っ」

「やあ…やだあ…んう♡」

「だめです。逃げるな」

「きゅう♡」

顔を逸らそうとすると、すぐに力強い腕で顔を引き戻され、さらに深い口付けをされてしまう。ぎゅうっと引き締めた唇を熱い舌でくりゆくりゆ♡とこじ開けられる。だんだんと力が入らなくなり、ずるずるとバスタブの中に沈み込みそうになる梨々子の体を、ロズウェルドが支えて深い口づけを続けた。

「んう…ロズ…やあ…んうう♡」

くちゅくちゅ♡と舌を絡められて、ぢゅうう♡と唾液を吸られる。びくびくと無様に跳ねる体をあやすように、ロズウェルドの大きな手が梨々子の華奢な腰を優しく擦る。齒列をなぞられ、上顎をちろちろ♡と舌尖であやされたかと思えば、ぐう♡と舌を外に引っ張り出されて、目を見ながらぢゅうう♡♡と音を立て、吸い上げられる。

(やっ…こんなこと…なんで!)

前世の美しい自分には指一本触れなかったロズウェルドの奇行に梨々子は混乱しながら唇を貪られる。ロズウェルドが最後にちゅっ♡と唇に可愛らしいキスを落として顔を離れた時には、梨々子はお湯が半分程まで溜まったバスタブの縁に上半身がもたれかかった状態で、はふはふと息を整えることしかできなかった。そんな梨々子を見て、目を細めたロズウェルドは

広いバスタブに入ると、自分の膝の上に梨々子の体を向かい合わせるように座らせた。

「イヴ」

「っう…イヴじゃ…ないっ」

「ならいい加減今の名前を教えてください」

「っ…あ、あなただって名前を言っていないじゃないっ！」

俯いていた梨々子は顔を上げて、自分の腰を優しく擦っている男を睨みつけようとした。しかし、ロズウェルドがあまりにも優しく、そして幸せそうな目で自分を見つめているが分かり、顔を赤くしてまた俯いてしまった。

「な、なんでそんな顔をっ…」

「ん？そんな顔ってどんな顔ですか？」

「ふう…やっ！」

ロズウェルドが梨々子の体を抱き寄せて首筋に顔を埋めると、レロオ♡と舐め上げてくる。

「ひう♡」

「…お洋服が邪魔ですね。バンザイできますか？」

「やつ！ぬ、脱がないから！」

「服を着たままエッチしたいんですか？」

「え、え、えっち!？」

「そうです」

「え、え、え、えっち!？わ、わたし!？」

「あなた以外誰とするんですか？」

クスクスと笑うロズウェルドが混乱のあまり動きを止めた梨々子に「はい、バンザイ」と言って勝手に上のTシャツを脱がしてしまう。

「下はスカートですけどどうしますか？俺に脱がせてほしいですか？」

「っは！や、ぬ、脱がないってば！」

「はい、ブラジャー外しますからね」

「やだああ！」

安物のキャミソールを脱がされ、上半身はブラジャーだけになってしまふ。ロズウェルドの手がブラのホックにかかったところで、梨々子は必死に首を横に振ってロズウェルドから距離を取った。

「な、なんで今更えっちなんか！も、もしかしてロズウェルド、目が見えないの？」

「視力はどちらも2・0です」

「な、ならなんで！前世のあんなに綺麗な私は抱いてくれなかったじゃない！」

「…イヴ。こちらにおいで」

「っいや!!」

自分の間に答えず、事を進めようとするロズウェルドに嫌気がさした梨々子は、バスタブの水を思いつきりの端正な顔にかけてやった。ロズウェルドは口の中に水が入ったのか、「けほっ!」と大きな咳をしている。

「あはは!ざまあみろ!」

そう言って梨々子がバスタブから脱出しようとしたが、足を掴まれそのままズルズルと引き戻されてしまう。また膝の上に戻され、今度は逃げられないようがつちりと腰に手を回されてしまった。

「…悪い子ですね」

「ひっ…!」

ロズウェルドは低い声で唸りながら、濡れた前髪をかきあげる。その壮絶

な色気に、生まれてこの方まともに男と触れ合ったことのない梨々子はガチンと固まってしまった。

（こ、こんなロズウェルド、見たことない！前世ではもっと優しくて、紳士的で…こんな！）

また自分の思考に囚われている間に、ロズウェルドはブラのホックを外してしまう。

「きゃあ！」

「隠さないでください。全部俺に見せて」

「やだやだやだああ！見ないでっ！見ないでっば！」

前世の大きく張り出した胸と違い、今はいたって普通の胸の大きさだ。自分の体に自信のない梨々子は自分の手で胸を隠し、ぎゅうっと目をつぶって体を丸めて懇願する。

「お、お願い、もうやめてえ……。前世のことなら謝るから……。怒りが収まらないんなら、お金でもなんでも払って償うからあ」

みじめでたまらない。この男はきつと自分を辱めたいのだ。前世で自分の人生を無茶苦茶にした女を見つけ、今度は自分がその女の人生を滅茶苦茶にしたいに違いない。

「お願い：ロズ：ロズウェルドお：、もう許してえ」

ひっくひっくと情けなく泣き続ける自分はロズウェルドには滑稽に映っているだろう。そんなことを思っていると、ロズウェルドの手が梨々子の顎に優しく触れ、ゆっくりと顔を上げさせられる。

「ふあ……」

「俺の今の名前はロズです。さあ、言ってみて」

「ロ：ズ？」

「っそう。ロズです。あなただけのロズです」

「んう…♡」

ぽかんと口を開けた梨々子に、またロズがちゅつとバードキスを落とす。
「俺の名前は教えました。次はイヴの番ですよ？」

「っ…お、教えないっ！」

「また我が儘を…。意地悪しないでください」

「い、意地悪じゃないから！それに、あなたの名前を聞いたら私のを教える
なんて約束もしてない！」

「…前世よりも少し賢くなりました？」

「っ馬鹿にしないでよ！」

梨々子がキツとロズを睨みつけるが、当の本人はとにかく上機嫌でまるで眩しいものを見るように目を細めて、梨々子の頭を撫でる。

「じゃあお名前を覚えてくれるまで俺も意地悪させてもらいます」

「っ…は？…きやつ！な、なにっ!？」

ロズは梨々子のパンツをスルスルと脱がした後、腰に手を回してぐっと自分の股間に梨々子のそこを押し付けた。

「きゃあん♡な、なんか、硬いっ…♡」

「あなたが名前を覚えてくれるまで、おまんこにカクカク♡ってさせてもらいますね？」

「なっ…なっ！」

「…その様子だと今世もまだ処女みたいですね。安心しました」

「きやううッ♡♡♡」

ロズの手力がぐっと強くなり、梨々子の下半身を自分のちんぽの上に密着させる。ジーンズ越しでも分かるほど硬く大きく勃起したちんぽをま

ん筋にハメ込みながら、ロズが宣言通りカクカクと腰を振り始める。

「やつ、嘘！やだああ♡」

「っん♡こら、どこに逃げるおつもりですか？」

「ひうう♡♡♡」

思わず逃げようとする体にロズの逞しい腕が絡みつき、ぐっと引き寄せられる。顔をロズの逞しい胸板に押し付けられ、息が苦しくなった梨々子は上を向いて何とか息を整える。

「ふっ♡…可愛い顔…♡」

「っや！み、見ないで！」

目をつぶって未知の快感に喘いでいた梨々子は、ロズの声聞いて急いで目を開く。ロズは何度も腰を振ってまん筋を刺激しながら、梨々子の感じている顔をずっと眺めていた。

「やあああん♡おね：があい：みちややだあ：♡」

ぐすぐすと鼻を鳴らしながら顔を上げて懇願する梨々子を見て、ロズはぐっと眉根を寄せて耐えるような表情をする。

「ロズう：♡♡」

「：ちゃんと名前を呼べていい子ですね。このまま自分のお名前は言えますか？」

「ひうう♡」

ぶんぶんと首を横に振る梨々子に、緩い動きだったロズの腰の動きが激しくなる。

「きゃんっ♡んっ♡んッ♡んッ♡んッ♡」

「おまんこにヘコヘコっておちんぽこすり付けられたくて我が儘言ってるんですか？そんなことしなくても、後でおまんこの中を好きにだけド突き

回してあげますよ？まずは俺の舌でおまんこいっぱい舐めてあげます。俺の涎とあなたの唾液でおまんこから恥ずかしい音がするまでくちゅくちゅ♡って舐め舐めしてあげますからね。その後は可愛いこの薄いお腹の中にある子宮の入り口がだらしなく下がってくるまで、俺の指でおまんこかき混ぜてあげます。おまんこ汁もお潮もいっぱいぷしゃぷしゃ♡ってしましようね？全部俺が飲んであげますから、心配しなくても大丈夫ですよ」

「んきゅう♡やつ…そんな、こと、言わないでえ♡」

生きていくのに必死でこれまで全く性的なものに触れてこなかった梨々子は、羞恥のあまり涙まで流して縮こまる。耳を塞ごうとするが、ロズの腕がそれを許さず、レロレロ♡と耳朶を甘噛みされ、吐息を吹き込まれながら卑猥な言葉で思考を壊されていく。

「ん？はは♡おまんこからトロトロって汁が溢れてきてますよ？俺の言葉

でおまんこきゅんきゅんしちゃいました？かわいい…♡」

「っあう…ふあ…きやん♡」

ロズがぐうつと強くまんこにちんぽを押し付け、ぐりぐり♡と腰を左右に振る。

「やああ♡変なの来るっ…♡らめっ…変なのくりゅう♡」

「変なの来ちゃうんですか？」

「んっ♡くるう…♡きちゃうう♡ロズ♡こわ、こぁいいのお♡」

「大丈夫ですよ、姫。ほら、そろそろこの可愛いお口で名前を教えてください」

「ツロズ♡♡ロズ…こわいい…怖い…♡♡ロズ♡♡ロズ♡」

「…はい、ロズはここですよ。…お名前教えてくれたらこれやめてあげますから」

「ふうう♡ほ、ほんとぉ？」

「はい」

「っ…り、梨々子…」

「梨々子さん…ですか？」

「んっ♡うん、うんッ♡」

「…可愛らしいお名前です」

ロズはそう言って紅潮した梨々子の頬にキスした後、跡が付くほどに強く梨々子の腰を掴み、ばちゅっばちゅッ♡と音が聞こえそうなほど激しく腰を振りたくり始めた。

「っやああ~~~~♡うしよ、うそつきいッ♡やめるっていったああ♡」

梨々子が泣きじゃくってロズの胸板を拳で何度も叩くが、ロズは全く意に介さず、いやらしく笑いながら梨々子の体を責め続ける。

「すぐにやめるとは言っていないですよ？はは♡おまんこ汁、すごいぬとぬ

と…♡にゆるにゆるしてるの、服越しても分かりますよ?」

「ひぐうう♡やっ来るっ♡変なの…ん♡くるう♡」

「イクって言うんですよ、梨々子さん♡ほら、ロズのおちんちんでおまんこたくさん虐められてイクイクしてください♡」

「やああ♡やだやだやだ♡みないでっ♡見ないで、ロズ♡」

「だめ。梨々子さんが泣きじゃくりながらイクイクって言うの全部見ますから」

「んぎゅう♡ばかばかばああ〜〜ッ♡♡」

「バカでいいですよ。ほら、イって?可愛く喘ぎながらイク恥ずかしい姿、俺だけに見せてくださいね♡」

「いっぎゅうう♡♡♡」

梨々子は無意識にロズの体に抱き着きながらボロボロと泣いて絶頂する。

ひくひくと痙攣しながら初めての快感に涎を垂らす梨々子の顔を至近距離で観察しながら、ロズはあやすように頭や頬に口付けた。

「上手にイけましたね。とってもいい子でしたよ、梨々子さん」

「んう…ふえ…ふうう…。み…見ないでつていったあ…」

「…本当に頭がおかしくなりそうですよ」

ぐすぐすと泣き続ける梨々子の体から全ての衣類をはぎ取った後、ロズは自分のジーンズと下着を脱いで全裸になる。すでに硬く勃起しているちんぽを初めて見た梨々子は顔を真っ赤にして目を閉じると、ぎゅっとロズに抱き着いた。ロズはクスッと笑って梨々子を横抱きにして立ち上がる。そのまま、梨々子に深く口付け、怯えて縮こまる小さな舌に自分のそれを絡ませると、ぢゅぅぢゅぅ♡と音を立てて吸い上げた。最初は胸板を叩いて抵抗していた梨々子の体からだんだんと力が抜け、縋るようにロズの首に腕が

回された頃、ロズはやつと口づけを止め、二人の唇を繋ぐ銀糸を舌でレロつと舐め上げて笑う。

「体、あったまりましたね。ベッドに行きましょうか」



「降ろしますよ」

「ん…」

快感で茹だった頭ではまともな思考もできず、梨々子はロズにされるがままの状態になっていた。

「梨々子さん、自分でお股開けますか？」

「お…また…？」

「ん。ここ、俺のために開けます?」

「ひう♡」

ロズの手がもじもじとくねらせている梨々子の内ももを指でコスコス♡と撫でる。まんこがジンジン♡と痺れて何かが溢れそうになっている梨々子は、また涙をにじませ「そんなえっちなことできない」とむせび泣いた。「できないですか? 大好きな俺のために足を開くこともできないんですか?」

「ふう…なんで…そんな意地悪言うのお…」

自分の顔の前で腕をクロスさせ、梨々子がボロボロと涙を流す。もう終わって欲しいのに、ロズは一向に責め手を緩めようとしなない。

『愛してるわ、ロズウェルド。あなたが望むならどんな卑猥なことだってしてあげる』。そう言ったのはあなただ。…だから、ちゃんと、卑猥なこと

を、して、みせてください」

一言一言、ゆっくりと区切りながら、ロズが梨々子の足先から、脛、膝、内ももを吸い上げていき、赤い痕を残していく。そのたびにビクンビクン♡と体を震わせる梨々子の慣れない様子に、ロズはだんだんと息を荒しくしていく。

「ロズ…う」

「そんな可愛い声を出しても許しません。ほら、梨々子さん」

「きゃんッ♡」

ロズがクスクスと笑って、梨々子の頬にかぶつと噛みつく。

「きゃん♡ごめ…ごめんなひゃいっ♡おこ、怒らないでっ♡ロズ…ろずう」
「…こんなに可愛くて、本当に処女なんですか？ちよつと心配になってきました。…梨々子さん、俺にあなたが処女かちゃんと確認させてください」

「んう…ど、どうやって？」

梨々子が恐る恐る聞くと、ロズがベッドに横たわり、ぺたんと座り込んでいる梨々子を手招きする。

「俺の顔の上に膝立ちになって、自分でおまんこ開いて見せてください。処女ならおまんこ、綺麗なピンク色のはずですからね」

「っくくく！そ、そんなこと！」

「できますよね？あなたが大好きな婚約者が頼んでるんですから。…それともすでにほかの男に奪われたんですか？」

「ち、ちがっ！え、えっちなことしたいのは…ずっとロズだけだった！」

「ならできますよね」

「で、でも…！」

どうしてそんなことをしないといけないのか。前世では見た目が釣り合

っていたけれど、今世は違う。とんでもなく顔も体格も整ったスーパーアイドルと見た目も人生も平凡なライトノベル小説家。もう梨々子とロズの人生は交わらないはずだったのに。

「っ…もういや。お願い、もうロズのこと、忘れるからあ。だから許してっ」

「…は？」

「っひ！」

梨々子の言葉に、今まで砂糖を煮詰めたように甘い声音だったロズが殺気さえも感じる程に低く恐ろしい声を発する。

「俺を忘れる…？あなたが俺を忘れるんですか？」

「あ…あや…っ！ろ、ロズ？どうしたの…？」

「あなたが！あなたが俺をこんな風にしたんじゃないですか」

「きやああ！」

ロズは梨々子の足首を掴むと、上に引っ張り上げて梨々子の体をベッドに沈み込ませる。

「もういいです。慣れてないから優しくしてあげようと思ってました。けどまずは最初にあなたが誰のものなのか思い出させないとダメみたいですね」
「ろ、ロズ！やめ、やめて！」

「∴愛してますイヴ。俺が、あなたを犯して俺だけの女にします」
「っう♡」

梨々子の両足を割り開き、ぐっと腰を入れてきたロズが唇を舐めながら目を細めて笑う。そのまま内ももを両手で掴み上に押し上げてまんこを天井へと向けさせられた。

「やだああ、やめ、やめでえ！」

「梨々子さんのおまんこ、気持ち良すぎて何も考えられなくなるくらい俺

のべろちんぽでぬとぬとにしてあげます♡」

れえ♡と涎塗れの舌を出してロズがゆっくりと顔をまんこに近付けていく。

「やだやだやだああ♡」

「はは♡梨々子さんのおまんこ、すごく雌の匂いがしてますよ…？入り口もクパクパ♡ってしてて、俺に『早く舐めてえ』ってお願いしてきてるみたい」

「してない…そんなことお願いしてないからあ」

「…上のお口は意地っ張りですね。俺のお口でいっぱいくちゆくちゅ♡ってして正直にしてさしあげます」

レロオおお♡

「きやうううう~~~~~~~~ッ♡♡♡」

ロズの分厚い舌が梨々子のまん筋をゆっくりと舐め上げる。ぴんツ♡と両足を伸ばして快感に耐える梨々子は前世から恋焦がれていた男に自分の恥部を舐められ、半狂乱に陥った。

「いやああ♡だめだめだめ、汚いっ♡ロズウェルド、だめええ♡きたないきたないっ♡ロズが…っ、綺麗なロズが汚れちゃううう♡」

レロンツ♡レロレロレロレロレロレロツ♡

「ふぎゆうううう♡ロズっ…お口、お口離してえ♡ロズが汚くなっちゃうっ♡うええん♡」

くちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆく♡♡♡

「ロズう…っ♡んツ♡んうう♡ふああ♡お願いッ…っお願い♡いい子だから、いい子だからああ♡」

梨々子が自分のまんこに舌をねじ込み、ぢゆるぢゆる♡とまん汁を啜っ

ていくロズの髪に手をいれて優しく撫でる。その梨々子の動きに、ロズがビクツと反応して動きを止めた。

快感でバカになった頭の中では梨々子とイヴリンの境界が曖昧になってくる。梨々子は、まるで自分がイヴリンに戻ったかのように、まだ二人が小さな子供だった時、かつて泣き虫だった小さな護衛騎士を抱きしめて慰めていた時の様のように優しく彼を宥め始めた。

「ロズう…私の可愛いロズう…。おねがぁい、お顔見せてえ…？」

「っ！イヴ…っ」

「んう♡いいこお…いい子ねえ…♡」

「イヴ…ッ♡イヴ♡イヴ♡俺の…俺のイヴ♡」

「んッ♡きゃん♡」

ドロリと蕩けた瞳で梨々子を見つめるロズが、ピン♡と立ち上がった乳

首に視線を向けた後、梨々子に頬ずりする。

「イヴ…おっぱい、ちゅうちゅうさせて？」

「っで、でもっ…♡前より小さくて…ッ♡」

「そんなの関係ない。前のイヴもちろん可愛かったけど、今の姿も同じくらい可愛くてそそられる。お願い、ちゃんとおっぱい気持ちよくするからね？」

「んう♡」

指ですりすり♡と優しく乳首を撫でられ、ひくん♡と梨々子の腰が跳ね上がる。

「イヴ…♡かぁいい♡ロズにもっと気持ちよくさせて？」

「ん…うん…♡きもちくしてえ…♡」

「うん♡」

あゝ♡と大きく口を開けたロズが梨々子のおっぱいを口いっぱい頬張る。

「きゃああん♡」

そのままぢゅうう♡と胸全体を吸い上げた後、分厚い舌でレロレロ♡と乳首を舐め上げる。涎を垂らして快感に喘ぐ梨々子を恍惚の表情で眺めながら、ロズは尖らせた舌の先でピンピン♡と乳首を何度も弾いた。

「きゃん♡ひう♡んう♡」

「イヴ♡きもちいいって言って？ロズにおっぱいピンピンされて、おまんこヒクヒク♡ってさせて？」

「んう♡きもちいい♡ロズう♡きもちいい♡」

「かぁいいね…♡ずっと…♡ずっとこうしてあげたかった」

「んあん♡」

「イヴ。抱かせて？」

「抱く…？抱いてくれるの？」

耳元で甘く囁かれた言葉に、梨々子がポロッと涙を流す。

「ほんと？イヴのこと…抱いてくれるの？」

「…うん。抱きたい」

「ほんとに？ロズはイヴのこと、ちゃんとお嫁さんにしてくれるの？」

「うん、イヴをお嫁さんにする。…遅くなってごめんね」

「うんッ♡うん♡いいの♡お嫁さんにしてくれるなら、それでいいのッ♡」

ポロポロと泣きながら笑う梨々子を見て、ロズが一瞬痛ましそうな表情を見せる。しかしそれは本当に一瞬で、ロズはすぐに蕩けた顔に戻り、梨々子にキスをした。手早く自分のちんぽにゴムを付けると、すでにドロドロにぬかるんでいる梨々子のまんこにぬふううう♡とゆっくりちんぽを突

き刺していく。

「ん
う
う
う
う
う
う
う
う
う
！
！
？
？
？
？
♡
♡
♡
♡」

びくびく♡と可哀想なぐらいに跳ね上がる腰をロズが自分の体で押さえつけ、最奥まで腰を進める。

「っあゝゝ♡イヴ♡イヴの一番奥まで入ったよ？ロズのちんぽ、どこまで入ってるか分かる？」

ロズがゆさゆさと優しく腰を振ると、梨々子は目を白黒させながらきやんきやん♡と雌猫の様に喘ぐ。

「んっ♡ここお♡ここまで入ってるの♡」

飲みきれない涎で口元をベトベトにした梨々子がへラリと笑いながら自分の薄い腹を撫でる。それを見てぎゅうつと眉根を寄せたロズは前かがみになって、梨々子のまんこを激しくかき混ぜ始めた。

「きゃあんツ♡きゃんツ♡きゃんツ♡んぐう♡ おっ♡ おっ♡」

「っはあ♡イヴのひっくい声…めちやくちや腰にクルツ♡んぐう♡ほら、もつとロズのちんぽで感じて？前世の分までめちやくちやに犯してあげるからツ♡」

ぼちゅんツ♡ぼちゅんツ♡ぼちゅんツ♡ぼちゅんツ♡ぼちゅんツ♡

「んゝおおッ♡いきゅいきゅ♡なんかしゅごいのくりゅう♡ロズ♡ろずう♡」

「クソ♡ほんとに会えたツ♡好きだツ♡好きだツ♡好きだツ♡イヴ♡梨々子♡」

ぼちゅんツツツ♡♡♡

「あぎっ♡」

子宮口にぬぽんツ♡とちん先が嵌り込み、梨々子の目がぐるん♡と白目

を剥く。体からはぐりと力が抜け、ロズの体にしがみついていた両腕がだらりとシーツの上に落ちた。意識を手放したまま、まんこからぷしゃぷしゃと噴き出す潮を下半身に浴びたロズは「くぅ♡」と低く艶のある声を押し殺し、ゴムの中に大量の精液を吐き出していく。しばらくへこへこ♡と腰を振って梨々子のまんこを堪能したロズがずる♡とちんぽを引き抜いた。そのままコンドームの中の精液を梨々子の腹にぶちまけ、まだ硬いままのちんぽで腹全体に塗りたくった。

「…今度は俺があなたを守りますから」

意識がないながらも、ひくひくと体を震わせる梨々子を抱き上げ、顔全体にキスした後、ロズは祈る様に梨々子の両手を掴んで自分の額に当てた。



（私があなたを守ってあげる）

（強くなったからって誰からも守られないのはおかしいわ。あなたが私の護衛騎士なら私もあなたの護衛騎士になってあげるの！）

小さなロズと小さなイヴリンとの約束。

その約束は果たされたかどうか、どうして自分は覚えていないのだろう。

「ん…」

揺れを感じて梨々子がゆっくりと目を開ける。誰かの体にもたれかかっていたようで、梨々子はその人物の顔を見ようと顔を上げた。

「ん？ああ、起きたんですね、梨々子さん。おはようございます」

「ん…、おはよう」

ちゅっ♡と当たり前のように唇にキスされた梨々子は、しばらく呆けた後、その異常事態に気付いて慌てて後ろへ下がった。すると、思ったより狭い空間にいるようで、すぐに背中に何かが当たる。周りを見ると車の中のようで、外の景色がびゅんびゅんと後ろへ飛んでいっていた。

「なっ！なんで！」

「寝起きも可愛いですね、梨々子さん」

「っ！そ、そうじゃなくて！一体どこへ！」

「ああ、申し訳ありません。俺、明日から全国ツアーなんです」

「ツアー!?」

「はい。なので今から飛行機に乗ります。あ、梨々子さんの荷物は全て俺が

準備してますので、大丈夫ですよ。もし足りないものがあればすぐに手配するので、何でも言ってくださいね」

「は…？え…？」

「それじゃあ、一緒に全国ツアー、楽しみましょう」

「なんでえええ!!？」

嬉しそうに梨々子を抱き寄せ、キスしてこようとするロズの顔を両手で遠ざけながら、梨々子は悲鳴を上げたのだった。